

第3回： 農的地域生活向上と地場産業の育成

～「おじいちゃんの飼っている青い鳥を、ぼくにくれない？」

「いいとも。でも、その鳥はもう、世の中の騒々しい暮らしに我慢し切れなくなっているから、どうなってもしらんよ。」～

急峻な地形を持つ日本では、農家一戸当たり、また一筆当りの面積も小さく、自ずと生産価格も高くなる。一方、諸外国では広大な農地から単一作物生産により、大量・安価な農産物を作り出し、他国へ輸出している。日本の消費者もこのような海外からの安価な農産物を嗜好してきたが、近年の環境配慮、健康志向などの観点から、より安全性の高い農産物を望む方向へと向かっている。このような状況を取らねし、「有機農業」を取り入れ、農産物の付加価値を高めると共に、地域住民の健康増進、地域振興を行っている地域がある。



Copyright: 小学館



当時の町長は、林業の町であった綾で「林を切るな」と言って住民を驚かせたと聞いた。綾町は宮崎県中部にある人口 7,000 人程度の町。現在、人口の 3 割が農業に従事するこの町では、行政主導型で「自然生態系農業」を実践している。元々、町民、特に老人医療の健康増進を目的とした有機農法による一坪農園奨励から始まった園芸療法活動は、現在、有機農業開発センターの設立、町独自の有機農産物認証基準の設定、有機堆肥プラント建設、有機農産物の産直・市場出荷などに広がっている。さらに有機農業ばかりでなく、自然林の照葉樹林を観光資源に、また木工、染織、酒造など自然の糧を利用した地域振興策を展開しており、全国でも知られる町づくりと有機農業の融合化を図っている町である。

生活雑廃利用による肥料プラントからは有機堆肥が作られ、町のあちこちに認定証のある田畑が見受けられる。セスバニア、レンゲ等の緑肥混作、合鴨による田んぼでの除草が行われている。既に、農家の 7 割が有機農業に関係していると聞いている。一方、町はきれいに整備され、いたる所に施設所在を示す標識が立っている。街の中心地に置かれている有機農産物販売所横の池で町民が飲料水を汲み、販売所では有機農産物、田舎風食品の販売が行われている状況を見て、なぜか都会にはない生活の満足感を感じさせられる。

綾町の事例のように、地域の自然環境・独自性を生かし、住民の住環境改善に貢献できるシステムを作りながら、農産物に有機農業という付加価値を付け、消費者のニーズを先取りし、独自で販路を拡大してきたこのような取り組みは、国内外を問わず、今後の農村地域開発の一つの手本になる事例として取り上げることが出来よう。

海外からの安価な農産物の輸入は、多くの農地放棄をもたらし、ひいては農地・林地の持つ自然環境涵養能力を減退させ、農的地域生活向上を無視した方向に動いているのではないか。貨幣経済中心、生産性優先の経済効率だけで地球人の幸福が達成されるという考え方はあり得るのだろうか。



有機農産物販売所



有機農業認証水田



町中にある泉(町民が水を汲む場)